

「文化財総覧 WebGIS」の公開

—地図から多様な文化財を探す—

DEVELOPING A GIS FOR JAPANESE CULTURAL HERITAGE

高田 祐一 (奈良文化財研究所)

TAKATA YUICHI

(NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURAL PROPERTIES)

1. はじめに

2021年7月、奈良文化財研究所（以下、奈文研）では文化財をインターネット上の地図で検索・閲覧できる「文化財総覧 WebGIS」（以下、WebGIS）を開発した。遺跡・建造物・有形文化財など全国の文化財のデータ61万件を閲覧できる。機能やデータ等について紹介する。

2. 開発の経緯

奈文研では、1988年より不動産文化財データの全国センターシステムの一部として遺跡データベースを運用している。2003年からは遺跡の抄録データベース、2015年からは発掘調査報告書本文のPDFのデータベースである全国遺跡報告総覧（以下、遺跡総覧）を

運用している。それぞれ膨大なデータを蓄積しているものの、それを地理空間的に把握するためには、報告書を読み込み利用者自身で情報を再構成する必要があった。専門家であっても煩雑であり、まして市民からすると非常にハードルが高い。仮に自宅付近など身近に文化財が存在したとしても、それを平易に知ることができなければ、存在自体を把握できない。そこで、位置情報がある文化財を対象に、GIS（地理情報システム：Geographic Information System）に登録し、一般公開することとした。

3. 登録データ

GISにおいてはデータが重要である。今回登録したデータを順に紹介する。

(1) 抄録データ

発掘調査報告書には、発掘調査の概要を記した抄録が付加される。抄録には、遺跡の時代・主な遺構・遺物・位置情報等が記載される。奈文研では、2003年から全国の抄録データを集約している。抄録の位置情報は、位置データとして間違っているものがあり、注意が必要である。

(2) 遺跡データ

前述の通り奈文研では、遺跡データベースを運用している。遺跡データベースのデータ出典は、報告書を始め、集成や各種事典類である。また、奈文研では、遺跡データベースの内部データとして、都道府県が発行した遺跡地図の一部を調査研究目的で、デジタルデータ化していた。今回、この遺跡地図データも登録した。

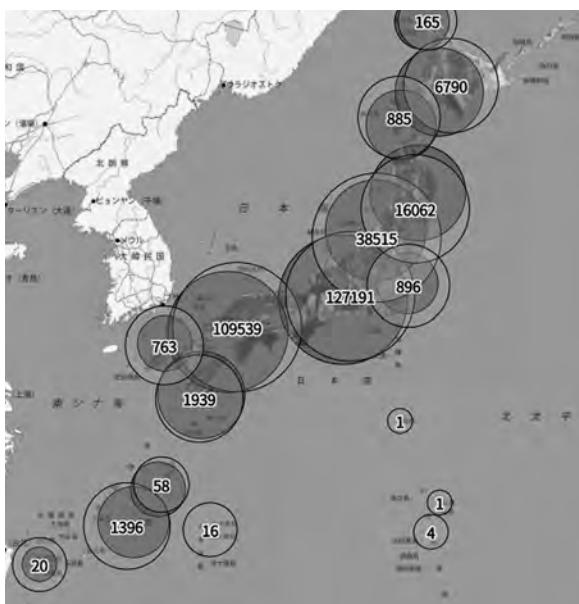


図1 全国の文化財分布状況



図2 皇居、赤坂周辺（東京）の文化財分布状況

（3）国が公開しているデータ

文化庁が公開している国指定文化財等データベースのデータ、国土交通省が公開している都道府県指定文化財データ（データの基準年：平成26年）のデータを登録した。

（4）遺跡地図のオープンデータ

近年、遺跡地図をオープンデータとして公開する動きがある。既に公開済みの北海道、群馬県、富山県、和歌山県、岡山県、熊本県のデータを変換し、GISに組み込んだ。

（5）自治体が公開しているオープンデータ

都道府県では、東京都および熊本県が文化財のデータを公開している。市区町村では、105の機関が公開しており、これらをGISに組み込んだ²⁾。

（6）平城京・宮跡に関する調査成果および木簡情報

奈文研は、長年にわたって平城宮跡・京跡域内の発掘調査を実施している。平城宮そのものの解明だけでなく、古代律令国家の建設過程の解明に重要な情報をもたらしてきた。特に木簡については長年、木簡データベース（現在は木簡庫）を運用し、研究者だけでなく広く一般の方々の利用の便を図ってきた。しかし、木簡の出土場所となると、奈文研が運用している地区名（例：6AACVS15）での表記であり、市民には場所の把握が困難であった。木簡の出土地点を奈文研が運用している平城京・宮内の地区割をGISに組み込み、

小地区単位で木簡の位置情報を登録した。今後、木簡以外にも地区ごとに出土遺物を登録できる基盤となつた。

4. 検索機能

これらのデータには、文化財の時代や種別（集落遺跡か古墳かなど）を付与した。そのため、目的に合わせて検索することができる。例えば、弥生時代の集落遺跡で石包丁が見つかっている遺跡、といった条件で検索できる。

文化財の所在を示すポイントをクリックすれば、詳細情報をポップアップで確認できる。遺跡総覧にPDFが登録されていれば、PDFをダウンロードでき本文を確認できる。

5. 地図データ

GISでは、基盤となる背景地図が必要である。今回は19種類の地図を重ねて表示させることができる。例えば国土地理院の標準地図・空中写真・活断層図等、産業技術総合研究所の地質図、奈文研の遺構図・地形図、兵庫県のCS立体図（高精度の地形情報）である。利用者の目的に合わせて、地図を重ね合わせることで、様々な分析が可能となる。また、文化財の防災にも活用できるだろう。



図3 古代の集落遺跡の立地状況



図4 平城宮跡造酒司井戸周辺の出土木簡

6. おわりに

WebGIS では、利用者の関心のある文化財を条件検索し、目的に合わせて地図を重ねることで、視覚的に結果を確認できる。これにより、今まで文章ではわかりづらかった文化財の立地状況を可視化できる。一方、文化財の位置情報が間違っているデータも可視化された。今後修正し、精度を高めていく必要がある。データ更新の仕組みづくりなど、課題は多い。継続的に運用し、改善を続けていきたい。

利用者にはたいへん好評で、2021年7月20日の公開初日は1日で15000のアクセスがあった。ぜひ、「文化財総覧 WebGIS」にアクセスいただき、全国関係機関による調査成果の活用につながれば幸いである。

【本稿に関するサイトの URL】

文化財総覧 WebGIS

<https://heritagemap.nabunken.go.jp/>

遺跡データベース

https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000556remains

抄録データベース

<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/search-site>

註

- 1) 高田祐一「遺跡抄録の現状と注意点」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 2』奈良文化財研究所研究報告24、2020
- 2) 記者発表資料「文化財総覧 WebGIS の公開」奈良文化財研究所文化財情報研究室、2021年7月19日。https://repository.nabunken.go.jp/dspace/bitstream/11177/9628/1/20210719_WebGIS.pdf (2021年8月27日確認)